

# 帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース  
vol.14

## 「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。  
人が多く出入りする活気ある「みなと」を  
イメージさせる言葉です。

## CONTENTS

◆特集1 教育普及プログラムの現場運営と課題 P.2-3

◆特集2 絵図が語る みなと新潟 P.4

- 常設展示室から 川村資料展示替え P.5
- おすすめの冊子 『イザベラ・バードの日本紀行 上・下』 P.5
- みなとびあ研究notes 「みなと町新潟の下駄作り」 P.6
- 館長日記 古代のエジプトと日本(一) P.7
- 収蔵資料紹介 菖蒲塚古墳経塚出土品(重要文化財) P.7
- みなとびあの人・人 企画普及課 小柳 日出夫 P.8



夕涼みコンサートの様子



新潟市歴史博物館  
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.14

■編集発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
■印刷/株式会社ジョーメイ

## 新潟市歴史博物館の催し物

2008年10月～2008年12月

企画展	企画展開連イベント・講座	体験プログラム
10月	9/20～11/3 4日 古文書講座+詳細展示解説 5日 展示解説会 12日 講演会 13日 展示解説会 13日 開館5周年記念感謝祭 25日 大型絵図ワークショップ 26日 展示解説会 26日 博物館講座	5日 ヨシ原で遊ぶ 19日 みなとびあで自然を感じてみよう 26日 どんぐりさんまい!
	11月	11/15～2/1 23日 博物館講座 15日 さらさら砂絵 16日 みなとびあで自然を感じてみよう
12月	2日 古文書講座+詳細展示解説会 3日 展示解説会	6日 木の葉でキャンドルスタンドをつくろう 7日 かみしばい 14日 クリスマスリースづくり 21日 もちつきをしよう 21日 みなとびあで自然を感じてみよう

※詳細につきましては、当館HP、または博物館までお問い合わせ下さい。

### 企画展開催中

#### 開館5周年事業 新潟開港140周年記念特別展 「絵図が語るみなと新潟」

■会期:平成20年9月20日(土)～11月3日(月・祝)	■開館時間 9:30～18:00(9月) 9:30～17:00(10月～11月) (観覧券の販売は、閉館30分前まで)
■観覧券 大 人 700円 団体 500円 大学生・高校生 500円 400円 中学生・小学生 300円 240円	■休館日 9月22日(月)・24日(水)・29日(月)・ 10/6日(月)・14日(火)・20日(月)・27日(月)

※土日祝日は小中学生は無料です。  
会期中、特別展を観覧され、ぼろとカーブッチでお食事(お茶・デザートのみの方を除く)をされた方に、「自家製マドレーヌ」をプレゼントいたします。

■展示解説会 【日時】10月5日(日)・13日(月・祝)・26日(日)・11月3日(月・祝) 14:00～(40分程度) ※事前申し込み不要、特別観覧券が必要

#### 「絵図が語るみなと新潟」関連企画(申し込みが必要)

- 特別展講演会「近世絵図史料の魅力—紫雲寺潟絵図と松ヶ崎堀割」  
【講師】久留島浩氏(国立歴史民俗博物館歴史研究部教授)  
【日時】10月12日(日)13:30～15:30 【会場】本館2階セミナー室 【定員】80人  
【資料代】100円 【申込み締切】10月3日(金) 必着
- 大型絵図ワークショップ「絵図を読み解こう—新潟湊のなりたちとかがたち」  
【日時】10月25日(土) 14:00～15:30 【会場】本館2階セミナー室  
【定員】15人 【資料代】100円 【申込み締切】10月17日(金) 必着
- 古文書講座+詳細展示解説会  
【日時】(1)10月4日(土) 14:00～16:00 沼垂町の移転と湊訴訟  
(2)11月2日(日) 14:00～16:00 「流作場」の形成過程  
【会場】本館2階セミナー室 【定員】40人程度 【参加費】500円(資料代・観覧券を含む)  
【申込み締切】(1)9月26日(金) 必着 (2)10月24日(金) 必着

申込みは往復はがき・電子メールに、①氏名 ②住所 ③連絡先電話番号  
④参加希望する関連企画名 を記入して博物館まで(応募者多数の場合、抽選)

◆申し込み・詳細につきましては当館HP、または博物館までお問い合わせ下さい。

○お問い合わせ先  
新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10 TEL025-225-6111 FAX025-225-6130 URL: http://www.nchm.jp e-mail:museum@nchm.jp

## みなとびあの人・人

No.14 企画普及課 小柳 日出夫

平成20年4月1日  
付人事異動により企画普及課長として勤務することになりました。歴史博物館の管理運営業務を中心に企画広報を担当しています。



企画展を初めとする広報活動の他、時にはテレビや映画撮り口ケ地の申込みが舞い込むこともあります。



博物館は今年で会館5周年を迎えます。新潟の歴史を知る情報発信の場であり、市民の社会的・文化的活動の場であり、市民交流の場として市内外を問わず多くの来館者に親しんでもらえるような博物館の情報発信を心がけたいと思います。

### 2008年度 博物館講座

毎月第4日曜日、当館学芸員が講師となり、調査や研究を進めている内容を報告します。

【会場】博物館本館2階セミナー室  
【資料代】100円 【定員】50人

- 9月の講座  
【テーマ】「蒲原平野の後期古墳とその被葬者を考える」(小林隆幸 学芸員)  
【日時】9月28日(日)13:30～15:00
- 10月の講座  
【テーマ】「町の消防・村の消防」(若崎敦朗 学芸員)  
【日時】10月26日(日)13:30～15:00
- 11月の講座  
【テーマ】「新潟の人々を描いた五姓田芳柳」(大森慎子 学芸員)  
【日時】11月23日(日)13:30～15:00

### 次回企画展

#### 第5回むかしのくらし展「米とくらし」

■会期:平成20年11月15日(土)～平成21年2月1日(日)

	一般	団体
大 人	500円	400円
大学生・高校生	300円	240円
中学生・小学生	200円	160円

※土日祝日は小中学生は無料です。

■開館時間:9:30～17:00(観覧券の販売は、閉館30分前まで)  
■休館日:月曜日(月曜日が祝日の場合は火曜日)、祝日の翌日

### 編集後記

みなとびあは今年5周年を迎えます。10月13日(月・祝)に、市民のみなさんに支えられ育まれてきた5年間を記念して、ボランティアさん主催で「みなとびあ5周年記念感謝祭」を行うことになりました。旧税関の塔屋ツアーなど、いろいろなイベントが白押しです。ぜひみなさんの機会にみなとびあにおいでください。(土田)



# 教育普及プログラムの現場運営と課題

土田 可奈

## 1.はじめに

新潟市歴史博物館では、教育普及プログラムを随時実施しています。教育普及プログラムとは、博物館の展示や、地域の歴史や文化を、楽しみながらより深く理解するためのプログラムです。当館では、常設展示や敷地内にある歴史的建造物の解説(ガイド)や、体験することを通して歴史や文化を理解することを目指す「たいけんプログラム」その他いろいろなイベントを行っています。

これらのプログラムを実施するためには、利用者が効率よく心地よく安全に博物館を楽しむことができるように、事前の準備や打ち合わせが必要です。

今回は、たいけんプログラムと、展示解説などで対応することが多い団体見学を例に、どのように運営しているのかを紹介し、課題を考えたいと思います。

## 2.たいけんプログラム

■たいけんプログラムとは  
当館の本館1階に、体験の広場があり

ます。体験の広場は、子どもから大人まで、楽しく遊びながら、昔の人たちの知恵や工夫に気付いたり、新潟の歴史や文化について分かりやすく学ぶことができる当博物館の教育普及事業の中心となる場所です。ここでは、ほぼ毎週末、たいけんプログラムを行っています。

たいけんプログラムは、具体的な体験を通して、歴史や文化をより身近に感じ、理解する一助とするものです。対象は小学生以上の子どもですが、他に大人向けに行うこともあります。

現在、たいけんプログラムは年間六〇回ほど行っています。たいけんプログラムには、「まがたまづくり」や「さらさら砂絵」など定期的に行う定番のプログラム、新規のプログラム、ボランティアスタッフが主体となつて企画・実行するプログラムなどがあり、他に夏休みなどもたいけん講座や大人体験講座、企画関連のものもあります。

■プログラム「まがたまづくり」  
まがたまは古代のアクセサリーで、本

ここでは、定番プログラムである「まがたまづくり」を例に、たいけんプログラムの運営について考えます。

物はヒスイなどで作られますが、このプログラムでは加工しやすい石を使用します。

プログラムは、導入としてまがたまについて話をした後、石に鉛筆でまがたまの形を書き、キリでひもを通す穴を開け、後は紙やすりで形がでるまで削っていきます。形が整ったら、細かい紙やすりで磨いて出来上がりです。

まがたまづくりは、たいけんのひろばボランティアを中心に行われています。一人分の材料が一つのビニール袋に詰められており、ボランティアスタッフが自主的に用意するよう、使用する道具類も一箱に収納してあります。材料を袋に詰める作業なども、月に一度設定している作業日に、



まがたまづくり

ボランティアスタッフがを行っています。

このプログラムは、ボランティアスタッフが主導で定期的に行うほか、学校団体や子ども会などの要望に応じて開催しています。

## ■対応スタッフの調整

まず年度のはじめにその年に開催するたいけんプログラムに応じて、ボランティアスタッフを募ります。その後、予定の変更や、調整がついて活動に参加するボランティアスタッフもいます。

団体でまがたまづくりの希望があった場合は、時間や受け入れ可能な人数などを館側と団体とで相談し、当日の予定を決定します。それをボランティアスタッフに知らせ、参加者を募ります。学校団体や子ども会などで、一度に二十〜三十人の対応をする場合は、複数のボランティアスタッフの手が必要になります。

ボランティアスタッフの都合の悪い場合は、職員が対応するように調整します。

## ■プログラム運営の問題と課題

まがたまづくりは、通常一時間三十分ほどかかりますが、団体の場合、滞在時間に限りがあるため、長くても一時間程度しか時間が取れません。多くの子ども

しないよう、調整が必要です。

予約していたことには、事前に観覧チケットが準備できるため入場がスムーズになる、ガイドの手配などができ効率的で充実したサービスを受けることができる、来館時間などを事前に調整して、混雑や他団体との重複を避け快適に安全に見学することができるなどの利点があります。

## ■下見と打ち合わせ

学校団体の場合、なるべく学校の先生方に事前の下見と打ち合わせをお願いしています。打ち合わせでは、見学の目的に沿うように、当日の対応や見学スケジュール、ガイドの有無や、ワークシートの使用についてなどを細かく打ち合わせます。また、ミュージアムシアターは二〇八人、セミナー室は八〇人が定員で、展示室で一度に案内できる人数は四〇人ほどです。人数の多い学校ではクラスごとや複数のグループに分けて、敷地や体験の広場、常設・企画展示室などを時間を区切ってうまく組み合わせ、効果的に見学・学習できるようにします。

## ■対応スタッフの調整

団体の希望に合わせて、案内をする学



敷地ガイド



常設ガイド

変に対応しますが、予約団体と連絡を取り合えるようにしておくこと、予約時によく確認を取ることが必要です。また、対応スタッフが現場で直面した問題点や課題を吸い上げて、より良い博

物館活動ができるよう、情報を共有し還元していくことが大切だと思います。利用者に対して対応することの多いボランティアスタッフや受付スタッフの日誌などは、重要な情報を提供してくれています。

現在、団体対応においてボランティアスタッフの存在は欠かせません。利用者の多様な目的に対応ができるよう、またボランティアスタッフ自身の学習意欲の向上のためにも、研修を重ね情報を共有していくことも必要です。

また、学校団体へスムーズな対応ができるように、連絡を受けた職員は希望の内容を正しく理解し、当日対応する職員やボランティアスタッフに、打ち合わせの内容を適切に伝えることが重要になります。

## 4.おわりに

たいけんプログラムと団体での来館を例に、現場の運営について話してきました。来館者の目的にあわせた、効果的で質の高いサービスを実現するためには、事前の打合せと準備、利用者の要望を実際に対応するスタッフに確実に伝えること、来館者が博物館をより効果的に利用できるためのスキルを備えた職員やボランティアスタッフの対応が必要です。

来館者が充実した博物館活動を行うために、現場の運営は、来館者、館職員、ボランティアスタッフと、それぞれをつなぐコミュニケーションが大切だと思います。また、対応スタッフが現場で直面した問題点や課題を吸い上げて、より良い博

私たちは、一時間では完成することができないため、家で仕上げてもらうことになり、打ち合わせの際に、このことはお話ししますが、直接個々の子どもに対応するボランティアスタッフは完成させてあげたい気持ちが強いです。時間のない場合は、穴を開けておくなど時間を短縮する工夫や、受け入れ人数を調整することなどが必要となります。

## 3.団体見学

### ■団体の予約

当館では、来館する団体の予約を受け付けています。予約する団体には、一般団体、学校団体(小中学校など学校単位で授業の一環として来る団体)、視察(公的機関などが公的な行事の一環として来る団体)などがあります。

日時や団体名、人数、見学予定場所、昼食会場やガイドなどの対応が必要かどうかを確認します。学校団体の場合、来館時期が春と秋に集中するので、特に人数の多い学校は他の学校と重複

# 絵図が語る みなと新潟

長谷川 伸

今年度は新潟が開港して一四〇周年にあたります。新潟にとって「みなと」は、どの時代においても人々のくらしとは切っても切れない関係にありました。それでは新潟の「みなと」とはどのようなところだったのでしょうか。

江戸時代以前、船は棧橋や岸壁などの施設だけでなく、入江や海岸、河口・川岸などの、自然の地形を利用して碇泊しました。なかでも、大河川の河口は重要な「みなと」でした。新潟の「みなと」は信濃川・阿賀野川と日本海が出会う河口にあったことが特徴です。

江戸時代、新潟の「みなと」は日本有数の湊として栄えました。しかし、開港後は近代的な港湾施設が整備されるまで、全く貿易等が振るわれない冬の時代もありました。実はこの背景には、江戸時代に信濃川と阿賀野川の流路や流量が大きく変化し、それに伴って、新潟の「みなと」とその周辺部の地形や環境もまた、大きく変わったことも要因のひとつであったと考えられます。

今回の展覧会では、こうした新潟の「みなと」の変遷を紹介します。まず、信濃川と阿賀野川の河口に蒲原・沼垂・新潟の三つの「みなと」が存在した戦国時代を考えます。新発田重家の乱

などを経て、新潟・沼垂は上杉景勝・直江兼続の手によって、上杉氏の湊として整備されました。なお直江兼続が支配した戦国時代末期の西蒲原地域内に、「角海浦」という「みなと」がありました。

17世紀になると、沼垂町は約五〇年間に四回移転しました。阿賀野川の洪水によって、信濃川と阿賀野川は河口で合流し、沼垂は浸食されたため、町は度々移転しなければならなくなりました。沼垂町の移転は、信濃川を挟んで対峙する新潟と、「みなと」の権利を巡る争いに発展します。

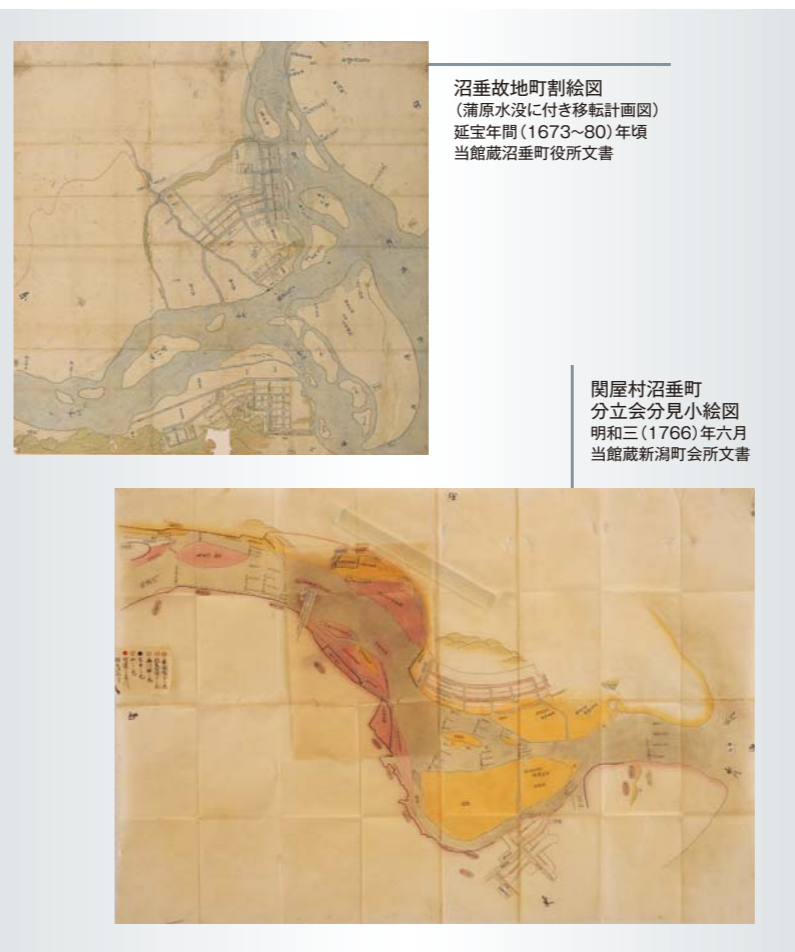
そして両者は、川が運んできた土砂が作り上げた「砂州」をめぐる争論を展開していきます。

一七二〇年代、紫雲寺湯干拓の過程で作られた松ヶ崎堀割は雪解け水の洪水で破壊され、現在の阿賀野川の河口が生まれました。これは土木工事技術の未熟さと自然の力がもたらした地形の変化ですが、このことは、新潟の「みなと」に大きな影響を与えました。このことによって、阿賀野川の水量が減り、新潟の「みなと」が浅くなってしまいました。この問題を抱えながら、新潟「みなと」は「開港」を迎えることになったのです。

今回の企画展では、当館所蔵の新潟

町会所文書・沼垂町役所文書という史料群の中の大型絵図を中心にして、地形の変化が新潟の「みなと」の形成・発達にどのような影響を与えていたのかを、紹介していきます。

これらの絵図は、新潟町・沼垂町の人々が「みなと」に関わる重要な資料として、町会所文書・沼垂町役所文書という史料群の中の大型絵図を中心にして、地形の変化が新潟の「みなと」の形成・発達にどのような影響を与えていたのかを、紹介していきます。



て大切に保存し、伝えてきたものです。また、近年発掘された近世新潟町遺跡の出土品も展示します。こうした人々の思いに心を寄せながら、湊町新潟の歴史を再発見していただきたいと思えます。

(はせがわ しん 学芸員)

## 常設展示室から — 川村資料展示替え —

8月5日から新潟奉行川村修就の治績を紹介するコーナーの展示が替わりました。今回は展示を新潟奉行所の建築に絞りました。

天保14(1844)年に新潟上知が実施され、新潟町は長岡藩領から幕府領となり、江戸から川村修就が新潟奉行として新潟町に赴任します。これにともなって奉行が暮らし、執務を行う新潟奉行所が、旧長岡藩領時代の町奉行所の一部を利用しながら建設されます。川村は配下の者を連れ10月に新潟町に到着しますが、その翌月には奉行所の設計が始まりました。新たに奉行所の役人の中から御普請目論見御用掛(工事が開始されると御普請御用掛と名称変更)が任命され、奉行所の図面を引いたり、費用の積算をしたりして仕事を進めました。翌年2月に建築の仕様がほぼできあがり、4月には入札が行われました。この工事を落札したのは新発田町の市島次郎八で、回船業や酒造業などをなりわいとしていました。なお、当時、次郎八は親戚の市島次郎吉(白山神社に大船絵馬を奉納)と組んで、越後幕領の御城米の江戸・大坂への輸送を請け負ってました。落札金額は、地盤工事と建物工事の2つの費目を合わせた8,200両余でした。

実際の工事は弘化2(1845)年1月に始まり、同年中に終了しました。建設の労をねぎらうため將軍から川村へ時服が下賜され、配下の者にも幕府から褒美が与えられました。

奉行所には長岡藩時代の町奉行所にはなかった

建物や施設がいくつか設けられました。その1つが白州で、幕府から行政だけでなく司法の権限を委任された新潟奉行にとって、職務上必要不可欠な施設でした。また、火薬製造所も建てられました。ここでは、幕府より異国船防備の命を受けた川村が、海岸に設置した砲台や海岸での砲術訓練が必要だった火薬が製造されました。その他にも、江戸から連れて来た配下の者が暮らすために役宅や足軽長屋も造られ、新潟町支配にふさわしい新潟奉行所ができました。

展示室では建て替え前・建て替え後の奉行所の絵図面、建築の仕様書、幕府への工事の伺い書、工事請負者への月ごとの支払い額やその日付が記された史料を展示しています。これを機に、8,200両余にも及ぶ大プロジェクトであった新潟奉行所の建設の概要を知っていただければと思います。

(若崎敦朗 学芸員)



### おすすめの1冊

『イザベラ・バードの日本紀行 上・下』

イザベラ・バード著 時岡敬子訳 講談社学術文庫 二〇〇八年四月・六月

明治初年の新潟は堀を舟が行き交う清潔できれいな街並みだったと、新潟の歴史を記す本には記述されてきました。その根拠は「一八七八(明治十二年七月)に新潟を訪れたイギリス人女性イザベラ・バードの『日本奥地紀行』」です。この本は二八八〇年に二巻本として刊行され、二八八五年に普及版が出ました。この普及版が一九七三(昭和四十八年)に平凡社東洋文庫から高梨健吉訳で刊行されました。バードの具体的な記述は、新潟の姿を漢詩文や新聞から推測してきた人々に衝撃を与え、以後、新潟のイメージとなってきました。

しかし、この普及版は二巻本の抄出で省略部分の多い本でした。今回、二巻本全訳が講談社学術文庫から刊行されました。普及版にはなかった、新潟におけるキリスト教伝道についての覚書、寺院や商店での見聞などが含まれ、新潟の町や人々の姿がより具体的に興味深く述べられています。明治の新潟の姿をより詳しくイメージできると思いますので、ぜひ一読をお勧めします。

(伊東祐之 学芸課長)



# 「みなと町新潟の下駄作り」

森 行人

江戸時代の新潟町は日本海交通で栄えた湊町でした。蝦夷地からは豊富な海産物が移入され、新潟からは蝦夷地で消費される米や生活用品を移出していました。新潟町では、蝦夷地向けの塗り物や下駄作りを生産する手工業が盛んになりました。近世から近代にかけての蝦夷地(北海道)へ向けた加工貿易は、湊町新潟の特徴の一つです。

下駄は、安政五(一八五八)年の資料によれば、岩船や周辺地域から材料を入手し、新潟町で加工し、製品は松前や南部、庄内、江戸などへ販売していました(「新潟表産物類取調書」)。下駄の生産量は、江戸後期には年産一〇〇万足を越えていました。新潟の下駄産業の沿革は、風間正太郎『新潟履物沿革』一九三二年にまとめられています。しかし、下駄職人の具体的な仕事の仕方や下駄作りの具体的な様相については詳しくはわかっていません。



広川広次氏の仕事の記録

写真に示した資料は、新潟市内の下駄職人広川広次氏が、毎日の仕事内容

期間	仕事先	主な仕事内容
1 (?)	(?)	糸子挽・玉切・カンナカ
2 1月29日	2月11日	塙倉
3 2月19日	2月28日	浅田工場
4 3月2日	3月21日	浅田工場
5 4月1日	4月8日	浅田工場
6 4月7日	4月16日	徳吉工場
7 4月17日	5月1日	浅田 龍蔵工場
8 5月2日	5月14日	浅田 龍蔵工場
9 5月16日	6月1日	浅田 龍蔵工場
10 6月1日	6月30日	浅田 龍蔵工場
11 7月2日	7月13日	浅田 龍蔵工場
12 7月17日	7月19日	浅田 龍蔵工場
13 7月20日	7月26日	浅田 龍蔵工場
14 7月29日	7月31日	浅田 龍蔵工場
15 8月2日	8月15日	浅田工場
16 8月15日	8月31日	浅田工場
17 9月1日	9月15日	浅田工場
18 (?)	(?)	徳吉
19 (?)	(?)	松浦
20 (?)	(?)	浅田
21 10月1日	10月3日	浅田工場
22 10月4日	10月9日	浅田工場
23 10月10日	10月15日	浅田工場
24 10月31日	11月15日	浅田工場
25 (?)	(?)	浅田
26 11月15日	11月21日	浅田?
27 11月22日	11月31日	(?)
28 11月1日	11月11日	(?)
29 11月13日	11月14日	(?)
30 11月15日	11月30日	(?)
31 12月2日	12月9日	(?)

表1 広川氏の仕事の記録(大正15年を抜粋)  
\*(?)は記載なし。(名称?)は連続した記載による推定。  
\*\*期間は休業日を含む

と仕事量、収入額等を書きとめたものです。記録は、一九二四(一九二六)大正十三(十五年)の三年間と短く、新潟の下駄作りにとっては新しい時期の資料です。また、当時の広川氏は二十代初めのまだ若い職人でした。こうした制約はあるものの、この資料は下駄職人の働き方を知ることができる貴重な資料です。

資料には、広川氏が「工場」へ出勤して下駄を作っていたことが記されています。複数の「工場」名が記されていますが、自宅で仕事をしていたという記載は有りません。資料の三年間は他所へ出向いて、下駄作りの仕事を請け負っていました。「工場」名の半数は下駄屋名で、西湊町通の「徳吉」、寄附町の「渡辺熊蔵」、礎町通の「竹内」、医学町の「北村」が載っています。「塩谷」

「村木屋」は同名の店が複数ありますが、いずれも新潟市内の下駄屋です。残りの「工場」も、恐らく市内の下駄屋と思われる。表1に示した通り、数か月連続で同じ下駄屋へ出ることもあれば、逆に二週間程度で別の仕事場へと移ることもあります。

「工場」下駄屋での仕事は、「木挽き」「糸子挽」「七分」「仕上げ」など木取りから仕上げまで全工程に渡ります。下駄の種類は、「男角」「女角」「天子供」「子供」「天目」「日光」等があります。また、この時期の広川氏の支出を記した資料には、下駄作りに必要な道具の購入費が挙げられています。カンナやノミといった道具や、天王寺鋸など木挽きの道具、手入れ用のヤスリなどを月々買い足しています。同氏の現在残っている道具には「廣川専用」という墨書があります。出勤先の他の職人の道具と混用しないための工夫と思われます。広川氏は、下駄屋での仕事の進行に応じて、様々な作業の工程をこなし、色々な種類の下駄を作っており、それに必要な道具を自前で揃え、出勤先の下駄屋へ持参していたことがわかります。なお、ご遺族からお聞きしたところ、第一次大戦頃には、下駄屋からの委託を受けて、自宅の作業場で下駄を作っていたそうです。

時期	家別	足駄職人(人)	出来(足)	出典	
1852年	嘉永5	40	180	1,100,000	新潟下駄足駄産物職人家別人数並高凡書付
	製造戸数		職工(人)	製造高(足)	
1904年	明治37	60	120	1,000,000	『新潟市統計一覽 第2回』新潟市役所、明治39年
1913年	大正2	65	230	2,900,000	新潟市『新潟市統計表』大正2年

表2 下駄屋戸数・下駄職人数・下駄製造数の比較

四)年には製造戸数六〇に対して職工数二〇〇人、大正二(一九一三年)には六五戸に対して職工数三三〇人です。幕末から大正にかけて、自前の店を持たない下駄職人が相当数いたことは確かです。この職人たちが新潟の下駄の生産を支えていました。昭和の初めには、広川氏のように何軒もの下駄屋に出向いて仕事を請け負う職人が存在していました。(もり ゆきひと 学芸員)

## 古代のエジプトと日本(一)

二〇〇八年六月五日に特別歴史講座「ナイル世界から西アジア世界へ」古代エジプト王朝の外交と辺境支配」が元信州大学教授屋形禎亮先生を御迎えして開かれました。日本人に絶大な人気エジプト文明ですが、珍しい高根の花として仰ぎ見るだけでなく、日本史の課題に引きつけ、両地域の共通の課題にそれぞれどのように立ち向かったのかという点を比較研究することで、日本の古代の理解を深められないかというのが私の願でした。

古代エジプトは西アジア世界の西南端の孤立した世界でした。エジプトはナイル河谷の東と西は砂漠、北は地中海、南はナイルの急流に画された南北に長い島のようなものと言えます。エジプトの農耕社会は西アジア中心部からの影響のもとで始まりましたが、大きな外圧を受けることなく、いち早く「統一」を達成し、大ピラミッドに代表される独自の大文明を開化させました。エジプト王朝が西アジア列強の国際競争の場に本格登場するのは新王国以降で、強国ヒッタイトとシリア・パレスチナの支配をめぐって覇を争ったのは有名です。古代の日本は東アジア文明圏の東南端の洋上に孤立する島国で、西方



壁画「ヌビア人の傭兵」  
(テーベ シェイク・アブド・クルナ タヌ二墳墓)  
(『世界考古学大系』第13巻、平凡社、1960年)

の中国大陸朝鮮半島から農耕文化を受容しながら、当初は大きな外圧は及ばず独自の文化的政治的発展をとげ、巨大前方後円墳に象徴される統一を達成し、遅ればせながら東アジアの国際関係の中へ参入します。古代日本と古代エジプトではいずれも後背地に広大な辺境が広がっています。アスワンハイダムの近くの第一急流以南のナイル上流がヌビアで、ヌビア人の征服・同化は第二王朝以来の歴史の治世の重要課題であり、征服地には多数の要塞都市が作られました。ヌビアの物的・人的資源の独占は王の権力の源でした。特に無尽蔵に産出したヌビアの金は西アジアの王侯達の垂涎の的でエジプトの外交カードとして絶大な力を発揮しました。(あまかす けん 館長)

## 収蔵資料紹介

菖蒲塚古墳 経塚出土品(重要文化財)

銅製の経筒二点、珠洲焼の壺二点、銅鏡五面、中国製青白磁の小壺二点、同合子二点、勾玉二点、管玉七点。これらは菖蒲塚古墳経塚出土品として国の重要文化財に指定されています。このうち勾玉二点、管玉七点は、経塚として再利用された菖蒲塚古墳に伴うものです。勾玉・管玉が納められた古墳は四世紀後半の古墳時代前期の築造と考えられており、その後、平安時代末から室町時代にかけて経塚に利用されました。

これらの資料は、西蒲区竹野町の金仙寺が所蔵し管理していたものです。寺の保存環境にも限界があり、重要文化財の管理に支障をきたす恐れがあることから、このたび一時的に当館で保管・管理することにになりました。

これらが出土した菖蒲塚古墳は国の史跡に指定されています。全長五三メートルの前方後円墳で、

また、青白磁の小壺と合子は景德鎮で焼かれたもので、これらの副納品はいずれも平安時代後期にさかのぼります。これまで一般に公開されることがほとんどなかったこれら菖蒲塚古墳経塚出土品については、当館で預かることになったことを機に、今後、展示紹介していきたいと考えています。

### 参考文献

- 『巻町史 資料編』巻町一九九四
- 『巻町むかしむかし 巻町双書 第四〇集』巻町教育委員会二〇〇五
- (小林 隆幸 学芸員)



檀家さんへのお披露目